

小松島小学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

- 基礎・基本の確実な定着と自ら考える力の育成を図る。
- 「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善を図る。
- 一人一台のタブレットやICT環境を効果的に活用し学力向上を図る。

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員 教諭 西崎 仁美 (算数主任)	委員	校長 後藤 由美	教頭 古田 哲也
		教諭 間 幸子(教務主任)	
		教諭 楠本 奈々(研修主任)	
		教諭 松本 亜由利(国語主任)	
		養護教諭 小泉 加余子	
	講師 山崎 翔悟(情報教育主任)		

校長

後藤 由美

【取組状況の把握について】

校内研修による共通理解等様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(めざす子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○漢字の読み書きや計算などの基礎的・基本的な知識・技能は少しずつ伸びてきている。 ●読書が好きな児童も多いが、文章を読むことに抵抗感がある児童も見られる。	・基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、国語・算数の「単元末テスト」で80点以上とることができる。 ・いろいろな文章に触れて、語彙力を高め、文章を正確に読んだり正しい言葉で書いたりすることができる。	・朝のジャンプアップタイムで視写、音読、漢字、計算などの反復練習及び小テストでの振り返りを行い、基礎的・基本的な内容の習得を図る。 ・読書活動を推進し、あわっこタイムズデーで新聞を活用するなどして文字に親しみ、語彙を増やすことができるようにする。		・単元末テストにおける基礎的・基本的な知識・技能で80点以上を達成する児童は6～7割程度であった。 ・新聞も含めた日々の読書活動を通して、様々な文章に触れる機会をもち、文字に親しむことができた。	・基礎的・基本的な知識・技能を確実に身につけるため、AIドリルを活用する。 ・あわっこタイムズデーを継続して行い、発達段階に応じて記事を視写したり要約したりして、文字に親しめるようにする。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(めざす子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○基本的な話型を見たり事前に原稿を書いたりして見通しをもつと、自分の考えや思いを発表することができる。 ●自分の思いや考えを筋道立てて相手にわかりやすく伝えることに課題がある。	・自分の思いや考えを筋道立てて相手にわかりやすく伝えることができる。	・ペア学習やグループ学習、討論などを授業に取り入れる。 ・「意見のもち方・言い方(手引き)」を作成し、ペア学習やグループ学習のときに使うことができるようにする。 ・授業の終末に振り返りを位置付けて、自分の考えや学んだことを書いたり発表したりできるようにする。 ・各教科において、単元の終わりに、学んだことを活用して表現する課題を設定し、取り組むことができるようにする。		・授業中にペア学習やグループ学習を必要に応じて取り入れることで、児童が自分の考えを深めたり相手に伝えたりする時間を確保することができ、全体学習での活発な意見交換につながった。 ・振り返りをする中で、次の時間への見通しをもったり、理解を深めたりすることができた。 ・単元で学んだことを生かして課題を設定することで学習内容を整理し、表現する機会となった。	・話型は必要な児童が使いやすいように内容と活用方法を見直す必要がある。 ・単元末の課題は、教科や単元によって設定しづらいこともあったので、他教科と関連づけながら表現する機会を増やしていく。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(めざす子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○多くの児童が落ち着いて学習に取り組む、学習や生活のきまりを守って学校生活を送ることができている。 ○異学年での活動や行事を通して、認め合う機会が増え、自己肯定感が高まりつつある。 ●自ら学習課題を見つけたり、計画を立てたりすることに課題がある。 ●十分できているのに、自信がなく、周りを気にしてしまう。	・自ら学習課題を見つけ、解決できるように計画を立て、実践することができる。 ・学校生活をよりよくしようと主体的に考え、行動することができる。	・学習の中での課題設定の場面を設ける。 ・適宜、振り返りを行う時間を確保し、自らの学びを確かめながら学習を進めることができるようにする。 ・委員会活動や異学年班での活動を通して、児童が活躍できる場面を作り、互いに認め合う機会を増やす。 ・メンター制度を利用し、教員間で授業改善の情報交換をする。		・学習課題を話し合う時間を設定することによって、意欲的に学習に取り組む児童が増えてきた。 ・課題設定を自分たちで行うことで、主体的に振り返りを行うことができた。そして次回の学習の課題と結びつけて考えることができる児童が増えた。 ・集会活動や運動会での全校ダンスなどを通して、異学年との交流の機会を増やすことでお互いの良さを認め合うことができた。特に6年生は自分たちの課題を見つけ、計画的に練習し、グループの上達につながるようにと考え、行動することができた。 ・授業方法やスキルを情報交換でき、授業改善につながった。	・課題を設定する際には、教師の支援がまだまだ必要である。子どもたちの学びたいという意欲につながる課題設定を促す方策を検討する。 ・自分で課題設定が難しい児童でも意欲的に取り組めるよう、個に応じた支援を教師が準備する必要がある。 ・異学年交流の機会を今後も計画的に設定していく。 ・メンター制度を継続し、研修の場を設定していく。互いに情報を交換しやすい雰囲気作りにも努め、意欲的に研修に参加する。

令和6年度 学力向上ロードマップ



